

上演 7

2023年7月31日2校目

九州 ブロック（福岡県）

久留米大学附設高等学校

「戯王【gi:oh】」

第47回全国高等学校総合文化祭演劇部門

第69回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

岐阜県立長良高等学校

中島 望温

文化祭でクラス演劇をすることになり、台本を書くことになった舞。試行錯誤を重ね台本を書き上げるが、結局はクラスメイトの一花が書いた台本が採用されてしまう。舞はそのことに関して悔しさがあったが、みんなと演劇をつくりたいという思いを優先するものの、自分の本当の気持ちを押し殺す苦しさに孤独を深めていく。

講評委員たちの中で多くの共感をよんだのが、「無観客の中で演劇をすることの意味」というセリフだ。コロナ禍で例年のようにありきたりな日常を送れなくなり、演劇も自分のやりたい事が思い通りにできなくなってしまう悲しさを私たちは知っている。様々な行事が中止になったり、規模縮小を余儀なくされたりなど、コロナが及ぼした影響は計り知れない。だからこそ、多くの委員が自分の姿を重ねて共感したのだと思う。

また、舞のように努力して書いた台本がみんなの役に立てなかったとき、受け入れて貰えなかった時の苦しさに息がつまるように感じた。自分の知らないところで物事が決まっていく、それは集団になればなるほど起きることで、どうしようもないことだが、クラスの間関係、カーストなど教室を取り巻く環境のリアルさを垣間見た。

他にも斬新な演出方法に驚かされた。例えば、ダンスや歌の中での場転や目まぐるしい照明の変化に感情を強く揺さぶられた。これらが強烈なインパクトを与え、ひとつひとつのシーンが色濃く印象に残った。

ラストシーンでは、今までの話が全て劇中劇であり、現実世界とは異なる舞の願望や理想が台本に現れていたのではないかと。孤独に感じていた舞が一花という自分を見てくれる唯一の光に導かれて、櫓から降りていくところは多くの委員の涙を誘った。

演劇というものはコスパが悪く、面倒だからこそ尊く感じられる、そんな意見もあったが、この作品を見たことで改めて演劇というものの奥深さを感じられた。「戯王」は、演劇への情熱、愛が表現される、いわゆる演劇の全てが詰まった作品であった。

